



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	共和主義と自由主義 ーアメリカ思想研究についての一考察ー
Author(s)	岩淵, 祥子; IWABUCHI, Sachiko
Citation	北大法学論集, 45(3), 185-208
Issue Date	1994-10-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/15583
Type	departmental bulletin paper
File Information	45(3)_p185-208.pdf



共和主義と自由主義

——アメリカ思想研究についての一考察——

岩 渕 祥 子

目 次

はじめに

一 自由主義解釈

(一) カール・ベッカー『独立宣言——政治思想史の一研究』

(二) ルイス・ハーツ『アメリカ自由主義の伝統』

二 共和主義解釈

(一) バーナード・ベイリン『アメリカ革命の思想的起源』

(二) ゴードン・ウッド『アメリカ共和国の創造』

(三) J・G・A・ポコック『マキャヴェリアン・モメント』

三 自由主義の復権

- (一) ジョイス・アップルビー「アメリカ革命イデオロギーの社会的諸起源」
 (二) アイザック・クラムニック「共和主義解釈再考」
 むすび

はじめに

一九七二年、ロバート・E・シャルホウプは建国期アメリカ思想研究の動向について、ひとつの興味深い解釈を提示した。

彼の「共和主義統合へ向かつて」という論文は、それまでのジョン・ロックに焦点をあてた解釈に代わり、共和主義の伝統を強調する解釈が建国期アメリカ理解の新たな枠組となりつつあることを指摘した。それは、アメリカ思想のロック的解釈から共和主義的解釈へのパラダイムの変更を告げるものであった。⁽¹⁾

アメリカ思想史における新しいパラダイムへの移行は、パラダイム転換が通常そうであるように、古いパラダイムに対立する研究の蓄積によって可能となった。シャルホウプの同論文は、それまでの研究を振り返り、アメリカ思想の分野におけるパラダイム転換過程を次のように説明している。第二次大戦までは、

ロックの理論が革命期アメリカ人の政治観に多大な影響力を有していたとする解釈が支配的であった。ところが、大戦後には、

ロック以外の思想、たとえばイングリランドの急進派の思想であるとか、フランシス・ハチソンといったスコットランド啓蒙思想の影響を指摘する研究が徐々に発表されるようになる。そして一九六〇年代には、建国期における共和主義の影響力を指摘する研究が進み、ここに共和主義によるアメリカ史解釈が新たなパラダイムとして登場することになったのである。

こうしてシャルホウプは、先行業績の動向を踏まえたうえで、この共和主義解釈が建国期のアメリカ理解に新たな光を投じるであろうことを予測した。しかしながら、続く一九七〇年代・八〇年代は、彼の予測に反し共和主義解釈パラダイムをめぐる激しい議論が戦わされた。しかもそれは、思想史の分野に限るものではなく、法学や法哲学、社会史、女性史、南部史とい

つたアメリカ研究のさまざまな分野にまで論争を引き起こすことになった。⁽²⁾かくして、共和主義解釈はパラダイムとして定着するどころか、反対に共和主義解釈と自由主義解釈との論争を導くことになったのである。

本稿は、この「共和主義解釈対自由主義解釈」とはいかなるものであるのかを、それぞれの立場を代表する研究を手がかりとしながら考察しようとするものである。その際、考察対象を建国期アメリカの思想の分野に限定して論争の経緯を紹介するとともに、二つの解釈の対立から明らかとなった「自由」の解釈の相違について若干の考察を加えてみたい。⁽³⁾

一 自由主義解釈

アメリカ思想の自由主義解釈とは、アメリカ思想の形成・発展において、種々の思想のなかでも特にジョン・ロックの影響を強調する。この解釈は、のちにロック以外の思想の影響力が指摘されるに及んで、その支配的地位を失うことになるが、それまでの解釈はまさに「ロックの他なし」(Locke et praeterea nihil) という状態であった。⁽⁴⁾

このように、自由主義解釈はアメリカ政治思想の特徴をロッ

ク的思想と結びつけるものであるが、そこで言われる「ロック的思想」の内容は一見して明らかとはいえない。すなわち、ロックの主張のどの面をもつてアメリカ思想の特徴とするのが明確ではない。そしてまさにこの「ロック的」なるものをめぐる解釈の相違が、自由主義—共和主義論争を構成する一つの要素であると言っても過言ではない。そこで、自由主義解釈を代表する二つの研究を取り上げ、そこにおいてロックの思想がいかに解釈されているかを具体的に検討してみたい。

(一) カール・ベッカー『独立宣言——政治思想史の一研究』

アメリカ革命の思想的淵源をロックの思想に求めた代表的研究の一つがベッカーの『独立宣言』(一九二二年)である。⁽⁵⁾同書は、トマス・ジェファソンの起草にかかる独立宣言の各草案の文言を実証的に比較検討することによって、そこに表明された思想が何に由来するのかを明らかにしようとした。⁽⁶⁾本稿の視点からベッカーの「宣言」が問題となるのは、以下の三つの点においてである。まず第一に、「独立宣言」に表明された思想が「自然権思想」を反映したものであると解釈している。第二に、当時のアメリカ植民地人が自然権思想を「当然のこととして」受け入れていたことを指摘し、「独立宣言」に表明された

自然権思想が、たんに起草者ジェファソンの思想のみならず、当時のアメリカ植民地の指導者間に広く共有されていた思想を反映していたとみている点である。第三に、この点が自由主義—共和主義論争に最も関係するところであるが、革命期のアメリカ人に影響を及ぼした思想家のなかで、特にロッキを中心にすえて議論している。ベッカーは、「大概のアメリカ人はロッキの作品を一種の政治的福音として吸収していたし、独立宣言は、その形体においても、その修辭においても、ロッキの統治論第二論文のいくつかの文章にきわめて近い」という判断を下したのであった。その結果、自然権思想と結びつけられたロッキの思想が革命期アメリカにおいて支配的であったかのような理解が導き出されることになったのである。

すでに述べたように、ベッカーの「宣言」は革命期の政治思想の全体を考察の対象とするものではない。彼の議論はあくまでも「独立宣言」に表明された思想的内容を分析し、そこから得られた結論をもとに当時の思想状況を類推したものといえる。しかしながら、同書が「独立宣言」公布当時のロッキの影響を重視し、植民地が「統治論」で展開された自然法の下での自由・平等の思想を受容していたとしたことは、ロッキ以外の思想家の影響を指摘するほかの歴史家たちの批判を招くことになった。

ただ、革命期におけるロッキと自然権思想の影響力に疑問を差しはさむ個別的の研究業績は、やがて大きく共和主義解釈に合流していくが、それまではこの「ロッキの他なし」という状況が続くことになった。

(二) ルイス・ハーツ『アメリカ自由主義の伝統』

一九五〇年代前半には、植民地人の思想形成に最も影響を及ぼしたのはロッキであるとするベッカーの見解に対し、ロッキ以外のイングランド思想の影響を指摘する研究もある程度の進展をみるようになった。⁽⁸⁾しかし、このような研究の流れに逆行するかのように、ロッキと「自由主義」とをあらためて強調する重要な研究が発表された。ルイス・ハーツの『アメリカにおける自由主義の伝統』(一九五五年)である。彼はまず、ヨーロッパと比較した場合、アメリカは旧世界に見られるような封建的、宗教的圧迫の伝統をもたないという認識から出発する。

アメリカはトククヴィルが指摘したようにいわば「生まれながらにして平等」な社会であったのであり、はじめから自由主義社会として成立した。そこでは「自由主義」は一種の「自然現象」であり、そのような「自然現象」としての「自由主義」は、建国時の貴族主義者と民主主義者との対立や、南北戦争、一九

世紀末の革新主義運動といった深刻な危機を経験しながらも、決してその存在を根本から脅かされることはなかった。その結果、アメリカにおける「自由主義」は、他の思想を排除する「絶対的自由主義」(absolute liberalism)と化し、ついに冷戦期において「反米」「反共」の名のもと、「自由主義」以外の思想を弾圧する自由抑圧の力としてあらわれる歴史の逆説すら生まれたのであった。

ハーツは、アメリカの政治思想の伝統が、自由主義、しかも古典的ロッキのな意味の自由主義の文脈で理解することができる点で、ベッカーと同じ解釈の系譜に位置づけられる。しかし、両者を同じ自由主義の文脈で語るには、いくつかの点を留保しなければならない。まず第一に、ハーツの考察はベッカーや後述の共和主義解釈のいずれよりも広く、建国期から一九三〇年代のニュー・ディールまでを射程としていることである。ハーツの研究は狭い意味での建国期思想研究ではない。第二に、ハーツとベッカーとは、思想史研究のアプローチが異なっている。ベッカーや共和主義解釈の目的はいずれも、「独立宣言」や一七・一八世紀の植民地人の書簡やパンフレット、新聞記事から当時のアメリカ人が影響を受けたであろう思想の起源を史料にそくして実証的に特定することにある。これ

に對して、ハーツの場合、史料の実証的分析を目的とはしていないのである。ハーツは革命の思想的起源それ自体の究明を目的としたのではなく、松本礼二氏の言葉を借りるならば、「自由主義が人民の共通の信仰として確立されるにいたるアメリカの特殊歴史的な条件を明らかにし、さらにこの条件が本質的には革命以来いささかも変化していないという事実」に注意を促すこと「⁽¹⁰⁾」である。

このようにベッカーや共和主義学派とは方法や目的を異にするとはいえ、ハーツは建国以来、自由主義とロッキとがアメリカの政治観において支配的であったとする見解を提示した。その点で彼を自由主義解釈の系譜に位置づけることに異論はなからう。これに對してロッキや自由主義以外の思想の影響を強調するのが次に述べる共和主義解釈である。

一一 共和主義解釈

ベッカーや、一九五〇年代の新保守主義史家⁽¹¹⁾に對して、一九六〇年代に入ると古典的共和政体を理想とする共和主義思想やイングランドのカントリー派、「反対派」の思想を強調する研究が⁽¹²⁾つぎつぎに登場する。やがてそれらの研究から、共和主義

解釈が新たなパラダイムとして形成されることとなった。この立場を代表するのが、バーナード・ベイリン、ゴードン・ウッド、J・G・A・ポコックである。⁽¹²⁾

この三人は、建国期アメリカにおける共和主義の影響力を自由主義のそれよりも強調する点で共通している。しかし、この三人はじつはロックの影響力についても、また植民地独立についても、異なった評価を下している。そこでまず、ベイリン、ウッド、ポコックの共和主義解釈を比較し、彼らの間の相違点を明らかにしたうえで、彼らと自由主義解釈派との根本的な争点を考察することとする。ただし、ここで取り上げる以下三つの研究は、議論の射程距離に違いがある。たとえば、ベイリンは植民地人を独立に向かわせた思想的起源の探求を焦点としているのに対し、ポコックは一八世紀全体を通じて支配的であった思想の考察を目的としている。そこで、ここでは視点を三者の特徴（他二者との相違点）の比較と革命期アメリカにおけるロックの思想的影響力を彼らがどのように評価しているかの二点に絞って検討することとしたい。

(一) バーナード・ベイリン『アメリカ革命の思想的起源』
バーナード・ベイリンの『アメリカ革命の思想的起源』(一

九六七年)は、植民地人をイギリス本国からの独立へと向かわせたのはいかなる思想であったのかという観点から当時のアメリカ思想の解釈を試みている。この研究の画期的性格は、それが建国期のごく一部の著名な政治指導者の言論をもとに論を進めるのではなく、膨大な数にのぼる論説やパンフレット、説法、詩、私信の丹念な渉猟をもとに議論がなされているところにある。それは、ジェファソンの「独立宣言」のみを考察の対象として植民地における支配的思想を論じたベッカーの『独立宣言』や、思想形成の土壌をヨーロッパと比較して概括的に論じたハーツの『自由主義の伝統』と比べ、歴史学的実証性のレヴェルははるかに高い。

史料編纂作業に携わることによって得られた知見から、ベイリンは次のように論じている。植民地人は独立を宣言するに至るまでに、ロックなどの啓蒙主義の伝統ばかりでなく、古典古代、ピューリタニズム、コモン・ローの伝統も受け継ぎ、さらにイングランド革命とそれに続く共和政時代の政治思想の影響を受けていた。そしてこの諸起源のなかで最も影響力が大きかったのが、イングランドの「反対派」「カントリー派」の思想である。権力壟断により墮落したイギリス内閣と腐敗し私利私欲を追求する議会とを批判した「カントリー派」の主張こそ、

まさに一七六三年以降、さまざまな形で植民地統制が強化され、植民地人が享受していた自由が脅かされつつあった植民地の状況に重ね合わせて理解されたといふ。¹³⁾

このような解釈をうち出すにあたり、ベイリンは「カントリー派」の主張のなかにも、自然権思想や社会契約論、混合政体による自由の保障などが含まれていたことを指摘している。しかし彼は、自由主義解釈派が強調するそれらの側面を重視しない。ベイリンが特に着目するのは、「カントリー派」の主張に見られる、権力の腐敗に対する憂慮であり、その腐敗の拡大がもたらす徳の喪失に対する「恐怖心」である。こうした「恐怖心」や「腐敗」は、同書第三章の「権力と自由」において詳しく論じられている。ベイリンの解釈によれば、イギリス国王のもとに集中が進み、腐敗しつつある権力に対し、「自由」を保持すべきことを説いた「カントリー派」の思想が、植民地人に受け入れられ、そうした「腐敗」や自由に対する「策略」の存在が現実的であったがゆえに、独立へと立ち上ることになったとみられる。

このように、一八世紀イングランドの思想家の影響力をカントリー派の思想より強調する点に関しては、ベイリンの議論はウッドやポコックの議論と大差はない。しかし、ウッドとポコックは、「カントリー派」の主張のなかでも腐敗に対する「徳」の擁護や私益に対する「公益」の優位性をめぐる議論が、植民地人に受け入れられ、彼らを独立し理想的共和政体の樹立へといざなつたと解している。これに対し、ベイリンの場合は「権力」と「自由」との対抗関係を主軸として、植民地人が「腐敗」を恐れ、権力集中によって脅かされる「自由」を保持すべく独立したと解釈するのである。いいかえれば、ベイリンの解釈は権力に対抗する自由を強調する点で自由強調型共和主義解釈であり、ウッドやポコックのそれはシヴィックヒューマニズム強調型共和主義解釈であるといえよう。

ロッキの影響力の評価についてはどうであろうか。ベイリンは独立に至るまでのあいだに植民地人が影響を受けたと考えられる思想的淵源を複数指摘し、そのなかにロッキの自然権思想や社会契約思想が含まれるとしている。¹⁴⁾このようにロッキの影響力は、思想的淵源の一つとして数えられてはいるものの、ベッカーやハーツ、またジョイス・アップルビーらのいわば新自由主義解釈学派¹⁵⁾と比較した場合にはその重要性は相対的に低く評価されている。しかしながら、同じ共和主義解釈派のウッドやポコックと比較した場合には、彼女らよりもロッキの思想的影響力を評価しているといえる。¹⁶⁾

ただし、ここで注意しておかなければならないことは、ベイリンがロックの思想を諸起源の一つに数えるときには、ロックの社会契約論と自然権思想を指しているのであって、新自由主義解釈派が主張するような、ロックの自然権思想を基礎とする近代的な個人主義的自由主義を指してはいないということである。もちろん、この点はただちに啓蒙思想のなかの個人主義的要素をベイリンが否定したものと受け取ることができない。しかし、新自由主義解釈派のようにロックの思想と個人的・経済的自由を結びつけ、それが革命時に大きな思想的影響力をもっていたとしているわけではない。つまり、ベイリンはロックの思想を一つの起源として認めてはいるものの、それが植民地人に及ぼした影響の内容については新自由主義解釈派と評価を異にしているといえるのである。

このように、ベイリンは腐敗した権力に対して植民地人が自由を保持すべく独立したと解釈した。しかし、その「自由」は、個人主義的自由ではなかった。この解釈は、アメリカの思想的淵源におけるロックの自由主義思想の影響力を過小評価するものであるとして、やがて新自由主義解釈派の批判を招くことになったのである。

(二) ゴードン・ウッド『アメリカ共和国の創造』

ベイリンがアメリカ独立の思想的起源を明らかにすることを目的としたのに対し、ウッドの『創造』はアメリカ建国の思想的背景に焦点をあわせている。すなわち、この大著の主眼は、独立までに植民地人が受容していた思想のなかで最も影響力を有していたのが一八世紀イングランドのホイッグの思想であることを踏まえたうえで、独立以後、各邦がホイッグの思想にもとづき共和国の建設を試みたことを論証するところにある。同書のタイトルが示すように、ウッドの主たる関心は一七七六年にアメリカが独立を宣言してから一七八九年に合衆国憲法が発効するまでの期間にある。その反面で、独立宣言以前の思想的起源の解釈については、ウッドはベイリンとほぼ同じ立場に立っている。

アメリカ革命の思想的起源については、ウッドとベイリンは一致するものの、独立の根本的動機をどう解釈するかという点で、両者は見解を異にする。ベイリンにとって独立革命を引き起こした動機は、腐敗した権力によって自由の存立が脅かされるという植民地人の「恐怖」であった。ところが、ウッドの場合、たび重なる本国の圧制によってイングランドの国制が危機に晒されていると判断した植民地人が、ホイッグが理想とし

た共和政体をアメリカにおいて実現しようとした結果、独立に至ったと解釈するのである。ダニエル・ロジャーズが指摘するように、ベイリンの解釈は、アメリカ植民地の独立は腐敗した本国政府に対する嘆きや失望によってもたらされたとする点で「ペシミスティック」な解釈であるのに対し、ウッドの解釈は理想の政体樹立という高邁な精神によりもたらされたとする点で「オプティミスティック」であるということができよう。⁽¹⁷⁾

このように同じイングランド思想を起源として特定しながらも、そのいずれの面を強調するかによってもたらされた解釈の違いは、建国期アメリカの「共和主義」をどう理解するかという点とも関係する。ウッドによれば、植民地人は腐敗し墮落してしまつたイングランド国制を新世界に再構築しようとするが、その場合の古き良き国制とは「共和政」であつた。しかし、過去の歴史が説くように、共和政であるだけでは統治の腐敗を回避し得ない。共和政体でありつつ偉大な国家であり続けることの成否は、共和国を構成する人民の資質と精神にかかつている。そこでは「儉約、勤勉、中庸、質素といった質実剛健な自立自営農民の特性が社会を堅固にする」ものと考えられ、逆にそうした特性と対立するような奢侈や個人的利益追求を志向することは社会を墮落させると考えられた。⁽¹⁸⁾つまり、ベイリンの

「起源」においては「権力」と「自由」との対立が主軸にすえられたのに対し、ウッドの場合、イギリスの「急進的ホイッグ」が理想とした共和政を独立後の各邦にいかにか樹立するか、いかえれば私利私欲よりも公益を優先する、有徳な人民からなる理想的共和政体樹立のための奮闘とその挫折とが叙述の中心をなしている。しかし、公益を私益に優先させ、奢侈や利害の多様性を共和国の存立の観点から否定する思想が支配的であつたとするウッドの共和主義解釈は、個人主義的思想が存在する余地を認めないため、やはりのちに新自由主義解釈学派からの反論を引き起こすことになつた。

ロッキの影響力に話を移すならば、ウッドは一七七六年の独立宣言以前のロッキの影響にはほとんど触れていない。このことは同書が、一七七六年以降を考察対象の中心としており、および革命期植民地人の言説において「急進的ホイッグ」の思想が支配的であつたことをあらかじめ基本的な前提としていふことによると思われる。アメリカにおけるロッキの思想的影響をウッドが取り上げるのは、一七七六年以降、植民地側が君主政を否定し、新たな統治体制を樹立する必要が生じたときである。ウッドによれば、反英抗争時に本国―植民地間で争点となつていたのは、帝国とその植民地の関係であり、ロッキが「統

治論』で展開した自然状態における個人の同意による社会の構築と関わるものではなかった。ロックの社会契約論がアメリカ人にとって重要になったのは、イギリスからの独立を宣言し、各邦レヴェルにおいて一種の自然状態ともいえる状況が発生したときであった。「本国との論争や植民地の政治が、変転する危機的状态を経験したことから、アメリカ人は新たに形成されつつある彼ら人民のあいだの関係について、また人民と国家との関係について説明するための、契約論的な新しい類推を必要とした」のである。¹⁹⁾

このようにウッドの『創造』は植民地を独立へと駆り立てた思想的影響力のなかの社会契約思想の影響力をほとんど考慮しなかったが、ロックとの関係ではここにもう一つ、未決の問題が残る。すなわち、自然法の下での自由で平等な諸個人という観念は、はたして革命前に植民地人に受け入れられ、独立革命の推進に影響を及ぼしたのかという問題である。アップルビーらの新自由主義解釈学派による共和主義解釈批判は、独立革命が無私の公民からなる失われた共和国再興のために戦われたとする解釈に立つならば、独立直後のアメリカ社会に顕著にみられる個人主義、物質主義、ブルグマテイクな利益政治の存在を説明できないというものである。彼らは、独立直後の社会状

況は、一七七六年以前にも個人主義的自由主義が存在していたと解してはじめて説明しようとし、ウッドやベイリンが一七七六年以前のロックの影響力を過小評価していることに異議を唱えるのである。²¹⁾

ところで、新自由主義解釈学派が独立以前のアメリカにおけるロックの思想的影響力を問題にするとき、彼らは自由で平等な個人に立脚する、より近代的な意味の「自由」や自由主義を指している。この「自由」をめぐる共和主義解釈派と新自由主義解釈派の認識のズレについては次節で詳しく考察することとし、ここではロックに由来するとされる個人主義的自由主義の影響力をウッドがどのように解釈しているかということについてのみ触れておきたい。

前述のように、腐敗した本国との対抗関係からアメリカ諸植民地は共和国の樹立を目標に掲げることとなるが、彼ら植民地人にとって共和国建設は、君主の首をはねるといふ単なる政体改変を意味する以上に、アメリカ共和国の「性質」が問われることを意味していた。イングラランドの急進的ホイッグが理想とする共和政体では、君主・貴族・庶民が牽制し合い、その牽制・均衡によって自由が擁護された。しかし、君主や貴族なき後の一階層社会において衆愚政や無政府状態に陥ることなく、共和

政が維持されるためには、私益を公益のために犠牲にする公德 (public virtue) の存在が必要不可欠であった。

共和主義解釈にしたがうならば、共和国の命運にとって人民の公德の存在が重要で、そうした公德重視の姿勢が植民地人のあいだに共有されていなければならないことになる。しかし、それでは彼らが「自由」を口にするとき、そこには「私益追求の自由」は含まれていなかったのであろうか。あるいは、アッブルビーらがいうように近代的自由主義と古典的自由は、区別されていたのだろうか。この点についてウッドは次のように説明する。アメリカ植民地人が受容したホイッグの思想においては、「最も重要な自由とは、公的なあるいは政治的な自由であり、個人的な自由と公共善とは、互いに敵対し合うものではなく、共存可能な (reconcilable) ものであった。本国からの独立という事態に直面した植民地人にとって、シヴィル・リパティとは「政治体あるいは国家の自由であり、個人的なそれではなかった」。「一体としての人民は彼ら自身の利益に反するようない利益を追求したりはせず、一般的な福祉を一体となって要望する」のであり、ここでは公的な自由と個人的な自由との間の矛盾・対立など存在するべくもなかったのである。²²⁾このように、公共善のために私的利益追求の自由が犠牲にされるとしても、

私的自由が主張されるためにはその前段階として公的自由が確立されていなければならないとする論法によって、二つの自由の矛盾・対立は顕在化しなかったのである。

こうしたウッドの解釈を踏まえたうえでアッブルビーの批判の妥当性について検討してみるならば、次の点が指摘されるであろう。まず第一に、植民地独立以前に個人主義的自由主義に裏打ちされた思考様式が存在していたか否かについては、ウッドの「創造」の中にも若干の言及がみられ、アッブルビーらが批判するほど個人主義的思考の存在そのものが否定されているわけではない。²³⁾しかし、アッブルビーが批判するように、彼の解釈では私益よりも公共善が強調されるため、自由主義的思考様式と共和主義的思考様式とが拮抗しつつ並存していたという解釈は生み出されない。このように、「自由」をめぐる二つの解釈の対立は、それぞれの解釈が近代的な自由主義的思考様式の影響力をどの程度とみているかの差に帰することができる。

しかし、近代的自由主義思想が植民地に存在していたことを認めたとしても、アッブルビーの議論には若干の疑問が残る。アッブルビーによれば、独立以前にも植民地人の中には近代的意味でのリベラリズムと共和主義とが並存していたということになる。しかし、本国の圧制に対して反旗を翻し、「自由」を

獲得せんと蜂起した植民地人にとって、はたしてその時の「自由」は近代的個人主義的自由を意味していたと言えるだろうか。ウッドが指摘するように、革命期、特に独立宣言発布に至る一、二年は植民地人の公共性重視の姿勢が最も高揚した時期であり、そこでは対本国との闘争関係において「植民地の自由」こそが目標であったといえる。したがって、近代的な意味での生産・所有に関わる経済的な自由を、植民地人をして独立へと推し進めた複数の思想的衝動のなかで特に強調するアップルビーの解釈には疑問が残るのである。

たしかに、ウッドは腐敗したイギリス本国からの自由獲得という、シヴィル・リバイテ熟が最も高揚した時期においてさえ、近代的個人的な自由の欠如を問題とする植民地人が少数ながらいたことを指摘している。しかし、彼らは独立の大義の前には、微少な勢力にすぎず、人民の私的利益志向はまだ潜在的でしかなかった。独立宣言の後、各邦レヴェルでは共和主義精神に立脚した邦憲法制定が進められ、理想とされた共和政が船出することになる。しかしながら、共和政を宣言することは、ただちに理想的な公的市民を創出することにはならない。現実の邦政治においては、公共の徳が失われ、同質であるはずの社会の中で異なる利害と利害がぶつかりあうこととなった。この時、建

国の父祖たちは古典的共和主義に基づく政治を断念せざるをえなくなった。こうしてウッドの『創造』は、多元的利益政治という、新しい政治科学に依拠する現実政治の展開を予定した連邦憲法の制定をもって「古典的政治の終焉 (the end of classical politics)」とするのである。⁽²⁴⁾

このように、ウッドの『創造』は、共和主義の展開を主軸とした建国史解釈を提示した。ここにおいて、ウッドが連邦憲法制定期にはアメリカ社会が共和主義的政治から最終的に脱却したと見るのに対し、連邦憲法制定後も共和主義がアメリカの思想の主流を占めていたと解釈するのが、次に考察するポコックである。

(三) J・G・A・ポコック『マキャヴェリアン・モメント』
ポコックの『マキャヴェリアン・モメント』は、その副題が示すようにルネサンス期のマキャヴェリの思想が大西洋の兩岸、すなわちイギリスとアメリカにおいて非常に強力な共和主義思想となったことを論証した大著である。ここでは本稿と関係する同書の第十五章「徳のアメリカ化」を取り上げる。

ポコックによれば、一八世紀英米の政治思想を根本的に特徴づけていたのはホイッグ派の思想と、ミルトン、シドニー、ポー

リングブロークといったネオ・ハリントン派の思想である。さらに、彼らの思想の系譜を遡って探求してみるならば、古典古代のローマの共和政に傾倒したマキャヴェリにまでたどりつくという。

アメリカ思想の淵源をミルトン、シドニーらに求める点において、ポコックとベイリン、ウッドとのあいだに違いはない。しかし、ポコックによるアメリカ政治思想の共和主義解釈は次のような点で特徴的である。まず第一に、共和主義思想伝播についての彼の解釈が、他のいずれの共和主義史家よりもヨーロッパ的思想とその「系譜」(lineage)という文脈において語られていることである。たしかに、ベイリン、ウッドも一八世紀アメリカ政治思想の淵源を一七世紀のイングランドの思想に求めてはいるが、ポコックの場合、一七・一八世紀英米の共和主義思想を、さらに遡ったヨーロッパ思想の系譜に結びつける点が特徴的なのである。

第二に、ウッドは、理想とされる共和政を維持するために個人は私益を公益に譲ることが求められたと解釈したが、ポコックの解釈では、共和主義で重要なものは、公益のための無私よりも、公民的資質(citizenship)と公民としての政治参加であったことが強調される。つまり、ポコックの共和主義はベイリン

やウッドのような共和主義の「規制的」な側面ではなく、「自己実現」に励む公民像が強調されている。⁽²⁵⁾

第三の特徴は、この点にポコックの特異性が最もよく現れ、かつ彼に対する批判が最も集中したのであるが、「徳」対「商業」という二元論的対立図式が一八世紀全般を理解する際に有効であるとする点である。一八世紀全般ということになると、アメリカの場合、イギリスによる植民地統治から反英抗争、一七七年の独立宣言、それに引き続いての各邦憲法制定、そして連邦憲法批准による大陸大の共和国建設までのすべてが含まれることになる。ポコックは、独立までの一、二年を頂点として盛り上がった古典的共和主義信奉の気運が、その後次第にその熱狂度を失って行き、連邦憲法制定に至っては古典古代を理想とする共和政治が放棄されたと解釈するウッドに反論し、腐敗をもたらす商業への反感、いいかえれば「徳」を「商業」と対立させる言説は、一七九〇年代に入ってもアメリカ人の思想を規定していたとする。

「徳」対「商業」で捉えるポコックにおいては、ロッキの影響力はどのように評価されるのであろうか。この点、ベイリンはロッキを諸思想のうちのたんなるひとつに数え、ウッドは過小評価した。しかし、ポコックはやや強引な、否定とも受け取

ることのできる評価をロックに対して下している。彼は、ロックの思想的影響力を犠牲にしたうえで、と前置きしながら次のように説明する。従来の解釈は、独立革命時のアメリカにみられた契約思想や自然状態への言及をロックと結びつけてきた。しかし、ルネサンスのシヴィック・ヒューマニズムから導き出される共和政の概念こそ、契約思想登場の舞台を準備したのであって、ロックの社会契約論ではなかった。また、反英抗争時の植民地人が抱いていた「慨嘆 (Jeremiad)」も、共和主義の腐敗に対する嫌忌から説明される。つまり、アメリカ共和国の建設は、自然状態への安易な回帰の観点から推進されたのではなくたのである。ポコックは、植民地人にとって抵抗と独立は、商業がもたらす腐敗と徳とが対峙し、拮抗しあうなかのアムビヴァレントで矛盾した契機 (moment) を構成するものとして理解されたと論じる⁽²⁶⁾。

これまで見てきたように、共和主義解釈派と一般に総称される三人の研究は、対象とする時代や「共和主義」の解釈、さらに自由主義に対する共和主義思想の影響力重視の程度においてそれぞれ異なっている。しかし、建国期アメリカにおける共和主義思想に多くの光をあて、その結果ロックの影響力を重視しない点では少なくとも共通している。こうしたロック的自由主義の軽視、あるいは無視に対し、その復権を唱える立場が登場する。これがいわゆる「共和主義—新自由主義論争」と呼ばれるものである。

三 自由主義の復権

(一) ジョイス・アップルビー「アメリカ革命イデオロギーの社会的諸起源」

アップルビーは、一七世紀イングランドの「反対派」「急進的ホイッグ派」の思想こそがアメリカ植民地を独立へと駆り立てた思想であったとする解釈に対し、異議を唱えたひとりである。彼女の「アメリカ革命イデオロギーの社会的諸起源」と題する論文は、一八世紀のイングランドとアメリカにおいては、単一のイデオロギーが支配的であったのではなく、古典的共和

主義と一七世紀イングランドの自由主義的経済思想の二つが対立しながら並存していたことを指摘した点で新しい。彼女は、革命期の植民地人の思想が共和主義の圧倒的影響下にあったとすると、独立直後から顕著であった個人主義、物質的繁栄志向、利益集団政治の存在を説明できないうとして、複数の思想が存在していたと解釈するよう主張したのである。

同論文は、ベイリンやウッド、ポコックらが思想的淵源とした「反対派」が置かれていた当時の政治状況や政敵との論争点の再検討を出発点としている。彼女によれば、一八世紀イングランドのウォルポール政権と在野派との論争は、たんに古典古代の追慕（アイザック・クラムニックいうところの「ノスタルジックな」思想）のみを軸として戦われたわけではない。政権派による国策としての商業拡大の可否があったのである。一面でこの場合の「反商業的」立場は、共和主義的な「徳」対「商業」という言説に依拠したものといえなくもない。しかし、ここでアップルビーが重視するのは、在野派と政権派の論争が、たんなる商業従事の可否をめぐるものではなく、政府が自然調和的市場経済に不当に介入することをめぐるものであったという点である。彼女は、「反商業的」な古典古代的共和主義思想からは、市場の自律性を前提とした議論は導き出されないの

あって、市場経済の発展という現状を認めたくらんで、政府の商業関与を認めるべきか否かを問題とするという思考様式は、一七世紀の自由主義的社會経済思想にその起源を求めることができると論じる。⁽²⁷⁾

それではアップルビーらが強調する一七世紀の経済思想の特徴とはどのようなものであろうか。まず、彼らの説く自然調和的市場モデルとは、自然の社会秩序を反映したものであった。この社会像の背景には、人間はだれしも、合理的に判断を下しうるという人間の認識と、さらに自然的社會秩序においては自律的・自律的な個人が互いに交流し合うという個人認識とが存在する。つまり、共和主義においては「私」に対して「公」が優位したが、経済思想においては「合理的」で「自律的」な個人が肯定的・積極的に捉えられたのである。

さらに、経済発展によってもたらされた繁栄は「私益追求」についても新たな認識をもたらすことになる。すなわち、古典的共和主義においては、徳と英知とを身につけた公民が、私益を投じ、公益の増進に励むことによつて、結果として私益も満たされるとされていたのが、経済思想家の理論では、共和主義思想が否定した「野心」「欲望」「生活向上意欲」が肯定され、私益追求とその充足による自己実現が認められたのである。⁽²⁸⁾

れはまさに「私益」に対するイメージの大転換ともいふべきものであった。

このような本国の思想状況は、アメリカ植民地にとつても、無縁なものではなかつた。一八世紀初めにはアメリカ植民地も本国イギリスの経済政策の下、経済的繁栄を實際に享受するようになった。さらに、植民地内部の政治状況に目を転じてみるならば、高級官吏が自らの利益に適用するような施策を行っていることが人々に明らかとなるにつれ、恭順の政治の基礎をなす、社会上層に対する人びとの信頼も揺るぎ始めることになつた。こうした経済発展と社会構造の動揺が現実に進むなか、植民地においても私益追求を肯定し、勤勉と節制に裏打ちされた社会的地位上昇を求める主張が登場するようになった。⁽²⁹⁾一八世紀のイングランドの思想状況と同じく、こうした私益肯定や社会的地位上昇容認といった思考は、公益を重視し、変化を否定する古典古代を理想とする共和主義思想に由来するのではない。アップルビーの共和主義解釈批判の要諦は、共和主義思想以外に思想が一八世紀のイングランドとアメリカ植民地において存在していたことを強調するところにある。

アップルビーの議論の重要性は、彼女が単にアメリカ革命思想の思想的淵源をより広く解釈すべきであるとして主張したことに

とどまらない。彼女の指摘は、私益肯定を前提とする社会的上昇志向の蔓延に対する態度が、ジェントリのような植民地社会の上層に属する人びとと貿易商や職工、小売商などの中・下層に属する人びととは異なっていたことをも指摘している。アップルビーは共和主義解釈があまり注意を払わなかつた植民地内部における「階層」という点に着目し、植民地社会のあらゆる階層が「無私」を美德とする共和主義思想を遵奉していたわけではなかつたことを指摘したのである。彼女によれば、たしかに植民地の中でも高等教育の機会に恵まれた社会上層のジェントリのあいだでは、古典教育の影響が強く、それゆえ反英抗争の際に彼らの理論的支柱をなしたのは、本国の「腐敗」にアメリカの「徳」を対置する共和主義思想であつた。しかし、非特権層にとつて本国政府による植民地経済の統制は、腐敗よりもまず植民地の繁栄に対する干渉・妨害にほかならなかつた。したがつて、近代的自由主義に依拠しつつ独立運動にコミットしていったとみられる。

アップルビーが社会の上層と中・下層とに、それぞれ古典的共和主義と近代的自由主義とを結び付けて解釈している点は議論の余地のあるところであろう。しかしながら、植民地アメリカに複数の思想が並存し、階層分化もかなり進行していたとす

る指摘は、あたかも植民地人が一つの思想に基づいて、あらゆる階層が全く同じ理想を掲げて独立へと向かったかのような印象を想起させる共和主義解釈の弱点を的確に突いたといえる。

(二) アイザック・クラムニック「共和主義解釈再考」

アイザック・クラムニックが一九八二年に発表した「共和主義解釈再考」³⁰も、アップルビー同様、基本的にロックや社会急進主義、ブルジョワ・リベリズムが、共和主義解釈によって過小評価されていることを批判している。しかし、同論文は自由主義と共和主義の影響力の程度を比較し、その強弱を測定しようとしたものではなく、議論の焦点をより絞り込んで、共和主義解釈派、なかでもポコックの『マキャヴェリアン・モメント』の基本的主張——一八世紀後半においても共和主義思想がアメリカ人の言説を規定していたとする主張——を批判したのである。

すでに述べたように、ポコックは一七九〇年代のフェデラリストとリパブリカンズの論争も、基本的には「商業」の是非をめぐるものであり、したがって一八世紀末にいたってもなお、コート対カントリーという対立図式が政治的議論のデイスコースを規定する枠組として働いていたと主張した。これに対しク

ラムニックは、次の三点から反論を試みている。彼はまず第一に、一七六〇年代にも、すでに「課税」や「代表制」といった「カントリー対コート」の枠組をもってしては解決できない問題が人々の議論の対象として存在していたことを指摘し、すべての争点が「徳」対「商業」といった共和主義思想に基づいて議論されたのではなかったとしている。クラムニックによれば、被治者の同意に基づく課税や公平で平等な代表選出、さらに権限受託者背信時の人民の革命権などの問題は、アングロサクソンの権利に基づいて回顧的に議論がなされたのではなく、むしろ自然権に基づいて議論がなされたのであり、そこにはロックの思想の影響力が大きく反映していたという。³¹

第二に、彼は議論する際に用いられた同じ「腐敗」や「徳」といった概念の内容も、一八世紀の前半と後半とでは変化したことを指摘している。たとえば、一八世紀前半における「腐敗」とは、公益を顧みず私益を追求することであったり、混合政体の機能不全によってもたらされる権限の集中を指したのに対し、一八世紀後半になると、「腐敗」は「怠惰」「放蕩」「非生産性」「無能」を意味し、腐敗した政治制度とは「能力のない人間が公職についていること」を指すようになった。³² また、「有徳」の内容も「政治的動物である」ことや「公益に対し私益を犠牲

にすること」ではなく、「勤勉であること」「生産的であること」を意味するようになっていたのである。⁽³³⁾

第三に、「有徳なカントリー思想」対「腐敗したコート思想」という図式を強力に押し進めることによって、階層対立が隠蔽されてしまっていると批判する。⁽³⁴⁾ポコックら共和主義解釈からは、「反商業」を唱える勢力があたかも全く利害を一にしていたかのような印象がもたらされる。たしかに、公益の尊重が私益の充足につながるとする共和主義においては、利害の多様性は否定され、社会の均質性が共和政体存立の要件となる。しかし、そうした共和主義の理想と一八世紀の現実とは合致していたのであろうか。クラムニックが明らかにするように、一八世紀後半、すなわち各邦政府内では急進派と保守派が対立し、全国レヴェルでは連邦憲法制定派と反対派が対立すると並行して、「貴族主義的」「資本主義的」あるいは「封建的」「ブルジョワ的」といった、階層分化を前提としたイデオロギーが用いられるようになっていたのである。つまり、急進派のいう共和政と、彼らによって貴族主義者と批判された人びとのいう共和政とは同一ではなかったのである。それにもかかわらず、「徳」対「腐敗」の構図においては、両者がともに有徳な公民からなる共和政を支持していたという点だけから、彼らを共通項にくくりい

れてしまう点を、クラムニックは批判したのである。

クラムニックの指摘は、共和主義の言説が一八世紀を通じて支配的であったとするポコックの見解に対する反証である。しかし、ここではクラムニックの批判が、一八世紀後半のアメリカにおける共和主義思想の影響を真つ向から否定しているのではないことに注意すべきであろう。クラムニックは「徳」や「腐敗」といった共和主義思想の鍵概念が一八世紀後半の言説から姿を消してしまっただとしていない。それらは依然、人びとの言説の中に存在した。が、そうした表面上は同じ概念も実はその中身を変え、「私益追求」と「徳」はもはやかならずしも相反するものではなくなっていた。つまり、クラムニックは共和主義思想の影響力を否定しようとしたのではなく、ポコックら共和主義解釈が概念の変容を考慮に入れていない点を批判したのである。

アップルビーやクラムニックの共和主義批判は、シャルホウブが仮定したように共和主義解釈の「統合」が定着しなかったことを示す。いわゆる共和主義パラダイムの形成以後も、アメリカにおける共和主義思想の影響力、あるいは自然権思想、社会契約思想の重要性が争点となって議論が戦わされてきた。しかし、新自由主義解釈による共和主義批判は、たんに二つの思

想の優劣の問題を指摘したもののだけと見なされるべきではなからう。アップルビーに代表される新自由主義解釈学派は、アメリカ社会内部の対立の契機が軽視され、かつてのロッキの解釈に代わり、共和主義コンセンサスが支配的となつている状況を批判したのである。いいかえれば、歴史を「抽象画的」に「理念化」して解釈する共和主義解釈に対する批判という側面を共和主義—自由主義論争は含むものでもあつたのである。⁽³⁵⁾

むすび

これまで述べてきたように、ベイリン、ウッド、ポコックらの共和主義解釈は新たなパラダイムをもたらし、それに対してアップルビーやクラムニツクらの新自由主義強調派が共和主義解釈の修正を求め、ここに共和主義解釈と自由主義解釈が並立することとなつた。しかしながら注意すべきは、新自由主義解釈派は共和主義解釈に修正を求めたのであつて、彼らの説く共和主義思想の影響力を否定しようとしたものではないということである。つまり、「共和主義対自由主義」論争の眼目も、アメリカの思想的起源を共和主義と自由主義のいずれか一方を二者択一的に選定しようとするところではなく、さまざまな思

想的起源への目配りの必要を強調するところにあつたというべきである。

新自由主義解釈派が提示した、共和主義と自由主義の「並存」は、共和主義解釈派のひとりであるベイリンによつても支持されることとなつた。ベイリンは、一九九二年に出された『思想的起源』増補版序文のなかで、自らが共和主義解釈派の一人と目されていることに対し、次のように記している。自分は、アメリカの指導者たちの思想を描き出すにあたり、彼らを一面的に「シヴィック・ヒューマニズム」としては解釈しなかつたと述べ、さらに、「革命の指導者たちは、『シヴィック・ヒューマニズム』でもあり、また『リベラルズ』でもあり、ただ異なつた時期と異なつた状況において、異なつた強調をしていた」としたのだと書いている。⁽³⁶⁾これは、自身の解釈に対する誤解を正すとともに、基本的には新自由主義解釈の見解に同意を与えたものと受け取ることができよう。

ベイリンの言葉にみられるように、「共和主義対自由主義」論争は、共和主義思想と自由主義思想の「並存」という一応の決着を見るに至つたが、はたして二つの思想が対立しながら並存していたのかという点については、なお疑問が残る。もちろん、自由主義解釈派は「個人主義的自由」や「個人性

(individuality)、「経済的自由」を強調する点で共和主義解
 釈派と対立する。しかし、彼らのいう「個人性」や「自由」は
 そもそも古典的共和主義、あるいはアメリカ的共和主義と無縁
 なのだろうか。本稿の結びとして、以下では革命の指導者たち
 は「シヴィック・ヒューマニズツでありリベラルズでもあった」
 というベイリンの指摘を手がかりに、共和主義と自由主義の親
 和性について若干の検討を加えてみたい。

すでに述べたように、アメリカ植民地人が書物を通じて受容
 した共和主義思想、すなわち古典古代の共和政体の復興をめざ
 す共和主義においては、「私益」は「公益」のために犠牲にさ
 れなければならず、したがってそこの「自由」とは自ら望む
 ところを追求する「自由」ではなかった。いいかえれば「放縦
 (licentiousness)」と結びつく個人的な自由は共和国の存立と
 引換に放棄されなければならなかったのである。こうした古典
 的共和主義思想はたしかに植民地人に影響を及ぼした。しかし、
 はたして彼らはオリジナルな共和主義思想があるがままに受け
 入れ、一八世紀において古典古代的な共和政を完全な姿のまま
 復興できると考えていたのであろうか。彼らが机上で知る古典
 的共和主義と、それ以外のさまざまな思想の影響を受けて形成
 されたアメリカ独自の共和主義との間には少なからざるズレが

存在したのではないだろうか。

このようなズレについては、個人的自由と公的(政治的)自
 由に関するウッドの説明の中に示唆を見いだすことができる。
 ウッドによれば、一七七五年のウィリアム・M・スミスの言葉
 に見られるように、アメリカ革命の指導者のあいだにも、経済
 的自由に対するアムビヴァレントな感情が存在していた。古典
 的共和主義の影響を受けた彼らにとつて、「富の追求」「富の蓄
 積」は「公益」を顧みないことを意味し、したがって「富」の
 獲得を認めることは共和主義の原則に反することになる。しか
 し、だとすれば勤労により財産を得、節制により財産を蓄積す
 ることも否定されるのか。勤勉による財産所有も、節約による
 富の蓄積も許されないのであろうか。ここには、共和国という
 理想のためには「個人的な自由」は放棄されねばならないが、
 自由の一部を成す財産所有まで禁じることは、自由そのものを
 危殆におとしいれることにもなるというデイレンマが存在した
 のである。⁽³⁷⁾つまり、古典的共和主義思想に忠実であろうとした
 植民地人も、そうした思想にもとづく理想的国制が古典古代の
 姿のまま再現可能だとは考えられなかったといえよう。

しかし、スミスによつて提起された疑問も、本国から独立し、
 共和国を建設するという大義の前には、微力なものでしかなか

った。本国に対して「自由」を保持するといった場合の「自由」とは、なによりもまず植民地の、すなわちパブリックな自由であった。たしかに、ここでは経済的な自由と結びつく個人的な自由は前面に出てこない。ここから、共和主義解釈では、個人性、個人的自由が軽視されることになり、その点を自由主義を強調する立場の歴史家は批判する。しかし、革命期アメリカにおける共和主義が、自由主義解釈、共和主義解釈のいずれもが前提とするほどには古典的な共和主義そのものではなかったとすると、個人性・個人的自由は、後者の強調するアメリカ的共和主義のなかにすでに包含されていた可能性もでてくるのである。

最後に、共和主義—自由主義論争により明らかにされた、「自由」「共和国」「徳」「腐敗」といった概念の変容について触れておきたい。この概念変容の指摘は論争の結果得られた収穫といってもよい。というのも、共和主義解釈がアメリカ思想と古典古代思想との継続性・類似性を強調するあまり、時代状況や概念の変容に注意を払わなかったことが、こうした概念変容に対する注意を促したともいえるからである。たしかに、独立に際しても、また各邦憲法制定に際しても、さらに一八世紀末の連邦憲法制定期においても、文言の上では、「共和政」あ

るいは「共和主義的であること」は選択の余地のないことであった。しかし、そうした鍵概念も実は状況に応じてその内容を変化させていたことが、新自由主義解釈の批判から明らかにされたのである。

共和主義解釈がアメリカ思想における古典的共和主義の影響を明らかにしたことは、重要な指摘であった。しかしながら、一八世紀全体を共和主義思想で語ることは、異なった状況における異なった争点の存在を曖昧にする。今や共和主義—自由主義論争は「リベラルかつリパブリカン」という帰結に落ち着きつつある。しかし、最近の研究は、概念内容の変化に留意しつつ、いかなる共和政体が現実に構築されようとしていたのかを、歴史学的に明らかにする方向に進んできているといえる。⁽³⁸⁾

註

(1) Robert E. Shalhope, "Toward a Republican Synthesis: The Emergence of an Understanding of Republicanism in American Historiography," *William and Mary Quarterly*, 29 (Jan. 1972), pp. 49-80.

(2) 例えば、*Yale Law Journal* は一九八八年の七月号で共和主義特集を組んでいる。また、一九八五年には *American Quarterly* が、翌八六年には *William and Mary Quarterly* が

同じく共和主義特集号を発行している。思想史以外の分野における共和主義—自由主義論争については、Daniel T. Rodgers, "Republicanism: The Career of a Concept," *Journal of American History*, 79 (June 1992), pp. 11-38 を参照。

(3) アメリカ史学史については、有賀貞「アメリカにおけるアメリカ革命史研究の展開」『アメリカ革命』(東京大学出版会、一九八八年)に、また、アメリカ独立革命期の政治思想については、佐々木武「英国革命」一七七六年—思想的独立革命論のために」阿部斉他編『アメリカ独立革命』(東京大学出版会、一九八二年)に多くを負っている。

(4) Shalhope, "Republican Synthesis," p. 49.

(5) Carl L. Becker, *The Declaration of Independence: A Study in the History of Political Ideas* (New York, 1922, rev. ed., 1942).

(6) なお、ベッカー以後の「独立宣言」の思想研究については斎藤眞「独立宣言」研究史素描」阿部斉他編『アメリカ独立革命』(東京大学出版会、一九八二年)所収を参照。

(7) Becker, *Declaration*, p. 27.

(8) Shalhope, "Republican Synthesis."

(9) Louis Hartz, *The Liberal Tradition in America: An Inter-*

pretation of American Political Thought since the Revolution (New York, [1955] 1991).

(10) 松本礼二「共和主義・自由主義・利益政治」アメリカ研究クールセルセミナー第八集、小川晃一・片山厚編『アメリカ憲法の神話と現実』(木鐸社、一九八九年)、一二二頁。

(11) アメリカ史学史における新保守主義学派とは、先行する革新主義学派に反論する形で登場したものである。革新主義学派が地域的、あるいは経済的対立の観点からアメリカ史を解釈するのに対し、ハーツに代表される新保守主義史家は、「一致や一貫性——ハーツであれば自由主義思想の基底性——を主張したことからコンセンサス学派とも称される。詳しくは有賀、前掲書参照。

(12) Bernard Bailyn, *The Ideological Origins of the American Revolution* (Cambridge, Mass., 1967, Enlarged Edition, 1992); Gordon S. Wood, *The Creation of the American Republic, 1776-1787* (New York, 1969); J. G. A. Pocock, *The Machiavellian Moment: Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition* (Princeton, N.J., 1975).

(13) Bailyn, *Ideological Origins*, p. 52.

(14) *Ibid.*, p. 27.

(15) アップルビーやクラムニクらの立場は「自由主義解釈派」あるいは「共和主義解釈批判派」として言及されるのが一般的である。しかし後述するように、アップル

ピーらは単にロッキの自由主義を再強調するにとどまるものではない。本稿ではベッカーやハーツらと区別するため「新自由主義解釈派」という名称を使用した。なお、ピーター・オウヌフは最近の論文の中で、アップルビーの立場を指して「新自由主義 ("neoliberal")」という語を用いている。Peter S. Onuf, "The Scholars' Jefferson," *William and Mary Quarterly*, 50 (Oct. 1993), pp. 671-699, esp. p. 676.

(16) ウッドの場合、独立革命時のイギリスとアメリカ植民地との間の争点は、帝国対植民地の関係であったため、ロッキの社会契約論は独立以前にはあまり接点を持たなかったとしている。ロッキの契約論が意味を持つのは、むしろ一七七六年に独立を宣言してから後、各植民地が政府を構築するときであったとする。ポコックの場合には、アメリカの思想的伝統におけるロッキの影響力の軽減にやや熱が入っているため、ロッキの思想的影響を否定している。Wood, *Creation*, p. 283; Pocock, *Machiavellian Moment*, Ch. XV, esp. p. 545. なお「ベイリン・ウッド」ポコックの共和主義解釈の相違については、Rodgers, "Republicanism" を参照。

(17) Rodgers, "Republicanism," p. 19. なお「ロジャーズは「ベシムステイック」という言葉をウッドとポコックの共和主義解釈を比較する際に用いているが、ベイリンも腐敗

に対する恐怖からアメリカ植民地が独立したとする点で、ポコックと同じく「ベシムステイック」な解釈に属するといえる。

(18) Wood, *Creation*, p. 52.

(19) *Ibid.*, p. 283.

(20) Joyce Appleby, "The Social Origins of American Revolutionary Ideology," *Journal of American History*, 64 (March 1978), pp. 935-58, esp. p. 937.

(21) *Ibid.*, p. 941.

(22) Wood, *Creation*, p. 61.

(23) *Ibid.*, pp. 64-65. ウッドは一七七五年のウィリアム・M・スミスの言葉を引いて、公共善のためには私益追求の自由が放棄されねばならないことに対する複雑な感情が革命指導者たちの間にも存在していたことを指摘している。

(24) *Ibid.*, Ch. XV. なお「ウッドはその後の論文「徳の喪失と私益の興隆」においてこの見解を改め、一七九〇年代においても共和主義解釈は有効であるとしている。Gordon S. Wood, "Interests and Disinterestedness in the Making of the Constitution," in Richard Beeman et al., eds., *Beyond Confederation: Origins of the Constitution and American National Identity* (U. of North Carolina P., 1987). 同論文の邦訳として、「徳の喪失と私益の興隆

——連邦憲法制定をめぐる私益と無私」(中野勝郎訳)

小川・片山編、前掲書所収。

(25) Rodgers, "Republicanism," p. 19.

(26) Pocock, *Machiavellian Moment*, p. 545.

(27) Appleby, "Social Origins," p. 949.

(28) *Ibid.*, p. 944.

(29) *Ibid.*, p. 953. なお、アップルビーは、社会の下層による平等な配慮要求は篤信とより合わせられているため、はたしてそうした思想が宗教的信条に由来するものか世俗的なりベラリズムに由来するものかの判断は難しいとしている。

(30) Isaac Kramnick, "Republican Revisionism Revisited," *American Historical Review*, 87 (June 1982), pp. 629-64.

(31) *Ibid.*, p. 635.

(32) *Ibid.*, pp. 660-61.

(33) *Ibid.*, p. 662.

(34) *Ibid.*, p. 635.

(35) この「抽象画的理念化」という比喩は斎藤氏による。

斎藤眞『アメリカ革命史研究』(東京大学出版会、一九九二年)、四六〇頁。斎藤氏は共和主義解釈と社会史学の歴史解釈を喩えて、前者を「抽象画的理念化」、後者を「細密画的具象化」としている。

(36) Ballyn, *Ideological Origins*, p. vi.

(37) Wood, *Creation*, pp. 64-65.

(38) たとえば、Terence Ball and J. G. A. Pocock, eds., *Constitutional Change and the Constitution* (University Press of Kansas, 1988); 中野勝郎『アメリカ連邦体制の確立』(東京大学出版会、一九九三年)。前者は、「一八世紀の前半と後半とでは、「主権」「自由」「共和政」「民主政」「国制／憲法」といった概念の内容が異なるとし、それらがどのように変容していったのかを明らかにした論文集である。後者は、「反共和主義的」政策を推進したとされる初代財務長官アレグザンダー・ハミルトンも、彼独自のアメリカ的共和政の実現を構想していたとする。

〔付記〕本稿は、平成五年度文部省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

THE HOKKAIDO LAW REVIEW

Vol. XLV No. 3 (1994)
SUMMARY OF CONTENTS

Republicanism v. Liberalism: An Interpretation of American Historiography

Sachiko IWABUCHI*

Introduction

I Lockean Interpretation of American Intellectual History

1. Carl L. Becker, *The Declaration of Independence*.
2. Louis Hartz, *The Liberal Tradition in America*.

II The Efflorescence of the Republican Revisionism

1. Bernard Bailyn, *The Ideological Origins of the American Revolution*.
2. Gordon S. Wood, *The Creation of the American Republic*.
3. J. G. A. Pocock, *The Machiavellian Moment*.

III The Retrieval of Liberal Individuality

1. Joyce Appleby, "The Social Origins of American Revolutionary Ideology."
2. Isaac Kramnick, "Republican Revisionism Revisited."

Conclusion

ABSTRACT

In 1972, looking over the accumulation of the unconventional explication in American intellectual history, Robert E. Shalhope anticipated that the new

*Doctoral Student, Faculty of Law, Hokkaido University; Fellow, Japan Society for the Promotion of Science.

studies emphasizing the role of republicanism in the political discourse of the eighteenth century would provide scholars with further insights. In his article, Shalhope concisely delineates how historians before World War II were guided by John Locke and his natural rights philosophy. But from the 1940's on, a challenging interpretation was on the rise, and it seemed that the new perspective took over the precedent's place. Shalhope named this shift "republican synthesis," hoping that it would produce a deeper understanding of the American Revolution.

Contrary to his expectations, the synthesis hardly engendered a new paradigm. Instead, it launched a fierce debate among historians about two guiding principles for interpreting early American history — republican and liberal. Through recapitulating the debate, I will try to explain the major differences between the two lines of interpretation.

Unlike the earlier studies, which contended that Locke's ideas dominated the colonists' mind, the new research focused on republicanism and civic humanism rather than Lockean liberalism. According to these republican revisionists, "republic" meant more than a form of government to the Americans in the eighteenth century. The revolutionaries adored the ancient republics and envisioned America as a recreation of them. In order to create and maintain a republic, people have to be virtuous, disinterested, and civic minded. Republican revisionists revealed how strongly and powerfully republicanism directed the mode of thinking in the early America.

Since the rise of this republican interpretation, the pendulum swung to the extreme where Locke's influence was utterly neglected. Here a counteraction occurred. Some started to reemphasize the Lockean persuasion. These so-called neoliberal scholars, however, did not intend to reestablish Lockean hegemony. Rather, their purpose was to rectify their opponent's unidimensional, idealistic, and class-free interpretation.

Now, the republican-liberal dispute has tentatively settled in the middle ground. Thus allowing an influential scholar to say that the revolutionaries were "both 'civic humanists' and 'liberals', though with different emphases at different times and in different circumstances." While this statement leaves the

historical argument ambiguous, recent studies are entering a new stage where the major historical research concerns what kind of republic the colonists actually had in mind and tried to create in eighteenth century America.